様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成 ２６ 年　 ６ 月 １１ 日現在

機関番号：１０１０５
研究種目：挑戦的萌芽研究
研究期間：2011～2013
課題番号：２３６５２０４８

研究課題名（和文）自伝に描かれた関東大震災の研究－関東大震災はいかに回想されたか－

研究課題名（英文）A study of the Great Kanto Earthquake described in an autobiography-How was the Great Kantou Earthquake recollected?-

研究代表者
柴口　順一（Shibaguchi, Junichi）

帯広畜産大学・畜産学部・教授

研究者番号：００２３５５６６

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　2,300,000円、（間接経費）　690,000円

研究成果の概要（和文）：　各自伝における関東大震災に関する記述を追うことで、それぞれの自伝を横断的に捉える試みを行なった。
　その結果、自伝における関東大震災のさまざまな捉えられ方や描かれ方が明らかになったと同時に、単なる出来事としての関東大震災とはまたちがった様相が浮かび上がっても来た。そのことによって、出来事としての関東大震災に関する研究にも大いに資するところがある。以後、その対象をさまざまな出来事（事件）に拡大して研究を広げていくことが可能である。

研究成果の概要（英文）：I performed a trial to catch each autobiography transversely by chasing a description about the Great Kanto Earthquake in each autobiography.
As a result, the Great Kanto Earthquake in the autobiography varies one came at the same time as was drawn, and one became clear even if an aspect different from the Great Kanto Earthquake as the simple event again rose. There is a place to contribute to a study on Great Kanto Earthquake as the event by it very much. I spread, and various events (case) can widen a study in the object afterward.

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：文学・日本文学

キーワード：自伝　回想　関東大震災　地震　表現

１．研究開始当初の背景

個々の自伝に関する個別の研究も重要であり、その研究もまた大いに進めていく必要があることはいうまでもない。しかし、自伝全体を見わたすような全体的・総体的な研究もまた是非とも必要である。これまでの研究においては、個別の自伝研究が圧倒的に遅れていることは言をまたないが、自伝の全体的・総体的な研究はまったくといってよいほどなされてこなかった。

２．研究の目的

自伝に関する全体的・総体的な研究を目標として、その方向性を模索するというのが基本的課題である。すなわち、個別の自伝に関する研究、あるいはその単なる積み重ねといったことではなく、それぞれの自伝を横断的に捉える試みを行なうことによって、自伝の全体的・総体的な研究への方向性を探ることである。

３．研究の方法

上記の目的のために行なった方法は、ある社会的な事件や出来事がそれぞれの自伝においてどのように捉えられ、また描かれているかを検討していくことである。その具体的な事件・出来事として関東大震災を取り上げた。自伝における関東大震災に関する記述を追い、その捉えられ方や描かれ方を検討することである。

４．研究成果

既存の自伝リストとしては最も詳細な『日本人の自伝　別巻Ⅱ』（平凡社、1982 年）所収の「付録　書目一覧」を基礎として、他のさまざまな資料を参照しながら新たに作成した自伝リストを基にそれぞれの自伝にあたった。その結果、900 冊あまりの自伝にあたることができた。しかし、それらのうちの半数以上の 500 冊あまりには、関東大震災に関する記述は含まれていなかった。ただし、それらのなかには震災が起きた時期を記述の対象としていないものもあった。自伝は必ずしも全人生を記述の対象とするわけではない。半生（前半生あるいは後半生）を描くものもあれば、ある一時期を描いただけのものもある。もちろん、時間的に震災を体験し得なかった人物はあらかじめ除外した。それはさておき、今回調査した範囲では決して少なくない数の自伝が関東大震災に触れていなかった。それだけ多くの自伝において、かつこれだけの大きな出来事が何ら触れられていないことをいかに解釈すべきなのかは、また別の課題になり得るであろう。

以下、記述のない 500 冊あまりを除く 400 冊あまりの自伝を調査した結果を記す。

震災体験時の年齢が最も高かったのは 83 歳、1840 年（天保 11 年）生まれ、最も若かったのは 2 歳、1920 年（大正 9 年）生まれであり、その時間的な幅は 80 年に及んでいる。最も若い 2 歳のケースは記憶が疑わしいという見方もあろうが、著者は「ありありと記憶している」と述べていた。ちなみに、年齢は満年齢であり、この当時 2 歳だった人物は震災後まもなくの 9 月 24 日には 3 歳になっている。80 年にわたる時間的な幅のなかで、体験時年齢にはむろん多少のかたよりはあるものの、70 歳以上の高齢層を除けばほぼ満遍ない年齢のものを集めることができた。ただし、年齢がどうしても判明しない者が若干存在する。職業等は実にさまざまである。政治家、軍人、裁判官、検察官、弁護士、警察官、医者、学者、牧師、神父、教師、作家、画家、音楽家、俳優、落語家、歌舞伎役者、歌手、その他広く会社員、公務員、農家、商家等々。もちろん、子供、学生、主婦、お年寄り等、無職の人物も少なくない。

震災体験の場所についていえば、むろん関東地方が大部分を占めているが、予想外にかなりの広範囲に及んでいることが確認できた。関東地方以外では、山梨県（甲府市）、長野県（松本市、軽井沢町）、福島県（福島市、高岡市）、宮城県（石巻市）、大阪府（大

阪市、豊中市)、兵庫県(神戸市)、京都府(京都市)、奈良県(奈良市)での体験がある。さらに遠隔の地では、秋田県(秋田市)、三重県(宇治山田市)、愛媛県(宇和島市)、岡山県(岡山市、呉市)、大分県(大分市)、福岡県(北九州市)、熊本県(人吉町)、北海道(札幌市、増毛町)がある。ただし、それら遠隔の土地におけるものは、基本的に直接体験したものではなく、震災を知った時の反応やその後の行動といったことが記されているだけである。それと同様な点では、海外で知ったケースもあった。アメリカ(ニューヨーク)、ドイツ(ベルリン、ハイデルベルク)、ロシア(ウラジオストック)、イギリス(ロンドン、オックスフォード)、フランス(パリ)、スイス(リュシュリコン)、中国(上海)、台湾(基隆)等である。とりわけ、ベルリンは7例もあった。あるいは、船上や車中といったケースもある。マルセイユ―神戸間、台湾―横浜間、横浜―シンガポール間の船上、あるいは福岡―広島間、大阪―神戸間の汽車中などである。

大部分を占める関東地方でも、東京都が多くを占めていることはいうまでもないが、そのなかでも多いのは 23 区内である。改めて確認しておけば、震災当時の東京は 15 区からなりたっており、現在の 23 区に比べればかなり狭い範囲に限られている。現在の 23 区は当時の周辺町村が多く含まれその範囲は大幅に拡大している。名称は当時の区名や町村名で記すという方法もむろんあろうが、現在の名称で記す方がやはりわかりやすいと考え、現在の区分けで記すことにした。町名その他の地名も同様、現在の名称で示した。残念ながら、23 区すべてを網羅する結果にはならず、17 区にとどまった。欠いているのは足立区、板橋区、江戸川区、葛飾区、練馬区、目黒区の 6 つである。荒川の外側 3 区の北東部と、板橋区、練馬区の北西部にかたよっているのが偶然かどうかは今のところ判明しない。17 区のうちで比較的多いのは千代田区、港区、文京区、台東区、中央区、新宿区の 6 つである。これらは、新宿区を除けば被害のより大きかった地区とほぼ重なっている。だが、荒川の外側、葛飾区と江戸川区も被害が大きかった地区であり、その因果関係を云々するにはさらに多くの自伝にあたる必要があろう。23 区すべてを網羅するためにも是非行う必要があり、以後の研究課題としたい。なお、震災体験の場所がはっきりと示されず、特定できないものもかなりの数にのぼっていることを付け加えておく。書かれていない以上いたし方がないが、今後他の文献等を参照して明らかにできる可能性はなくはないであろう。

震災体験の場所といっても、屋内なのか屋外なのか、また屋内でも自宅なのか外出先なのか勤務先なのかといった、よりミクロな場所のちがいもある。それは、その時に何をしていたかといったことと当然関わっている。屋内では自宅や実家あるいは下宿といったケースが多い。その時にしていたことの圧倒的多数は食事中、あるいは食事の用意をしている時、食事ができるのを待っている時といったものである。地震発生時刻が午前 11 時 58 分であり、まさに昼食の時間帯にあたっていたからである。もちろん、読書をしていた時、寝ていた時、宿題をしていた時、縁側にいた時といった他の行動もさまざまある。自宅のほかに実家というものも少なくないのは、9 月 1 日は大学生や高校生はまだ夏休み期間中であったことが関係していると考えられる。ちなみに、小中学校では多く始業式があった日である。ただ、その日は土曜日にあたっていたので、児童生徒が学校で体験したケースは少ない。外出先では知人宅ということもあるが、その他、映画館、本屋、百貨店、展覧会場、劇場、公園、温泉、旅館、病院等々がある。勤務先というのもむろん少なくない。工場、銀行、病院、役所、新聞社、

出版社、ホテル、学校、劇場等々。上記以外のやや特殊なケースとしては、裁判所で公判中、警察で取り調べを受けていた時、刑務所で昼食後といったものがある。屋内に比べれば屋外で体験したケースは少ない。友人宅に行く途中、昼食を買いに行った帰り、駅を出た時、運動場で草むしりをしていた時、神社で参拝中、あるいは橋の上やガード下というケースもある。人力車に乗っていた時というものもあったが、他の乗り物のケースは見当たらなかった。この時期、地下鉄はまだ存在しないが、鉄道網はかなり発達していたことは周知のとおりである。さらに多くの自伝にあたれば出てくる可能性はある。乗り物といってよいかは微妙だが、エレベーターに乗っていた時というものもあった。注目すべき特殊なケースといってよいであろう。

関東大震災に関する記述の量もむろんまちまちであるが、7 割近くは 5 ページ以下の記述量である。1 ページ以内の記述も少なくなく、数行程度のごく短い記述もある。ただし、出来事としての関東大震災に言及しているだけといった類のものは除外してある。比較的多めの記述では、6～10 ページが 70 例あまり、11～20 ページが 50 例あまりあった。最大のものは 60 ページ強。30、40、50 ページ台も数例ずつあった。もっとも、それぞれの自伝全体の記述量はまちまちであり、記述の全体に占める量はそれぞれ異なっていることはいうまでもない。自伝は、ときに数冊に及ぶ大部のものもあれば、新書程度のものもある。あるいは、雑誌や新聞等に発表されたごく短いものもある。しかし、本研究では一冊の書物としてまとめられたものを対象とした。自伝というジャンルは、自費出版のケースも少なくないという特徴がある。なかには少々厚めのパンフレットといってよいようなものもあるが、それらも対象にした。除外したのは、雑誌や新聞等に発表されただけのごく短いもののみである。

以上が、今回調査した結果の概略であるが、個々の自伝における詳細な検討については、来年度から逐次『帯広畜産大学学術研究報告』誌上において発表する予定である。そこでは、検討した 400 冊の自伝の一覧（題名、出版年、出版社に加えて生年月日、体験時年齢、体験場所、体験状況等の情報を含む）や、体験場所マップ（主として東京 23 区内）のような図も提示したい。

本研究は、関東大震災に関する記述に焦点を絞り横断的に自伝を研究したはじめての試みであり、以後、その対象をさまざまな出来事（事件）に拡大し研究を発展させることが可能である。今後はその方面の研究も考えているが、しかし、今回あたることができた自伝は一部である。もっとも、『日本人の自伝　別巻Ⅱ』所収の「付録　書目一覧」に掲載されている自伝の数は 2,300 冊あまりであり、その 4 割近くにあたった計算になる。残りのなかにも、時間的に震災を体験し得なかった人物のものも当然含まれていようから、残る自伝の数は半数を切っていると予想される。とりあえずは、残り半数の自伝にあたることによって、その網羅的な研究を目指すことが先決であると考える。

５．主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計　0 件）

〔学会発表〕（計　0 件）

〔図書〕（計　0 件）

〔産業財産権〕

○出願状況（計　0 件）

名称：

発明者：

権利者：
種類：
番号：
出願年月日：
国内外の別：

○取得状況（計　0件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
取得年月日：
国内外の別：

〔その他〕
ホームページ等

６．研究組織
(1)研究代表者
柴口　順一（SHIBAGUCHI, Junichi）
帯広畜産大学・畜産学部・教授
研究者番号：00235566

(2)研究分担者
（　　）

研究者番号：

(3)連携研究者
（　　）

研究者番号：